



技術を「デザインする」時代の到来

野部 達夫
TATSUO NOBE

((一社) 建築設備技術者協会 会長, 工学院大学建築学部 教授)

皆様、明けましておめでとうございます。本年も協会会員の皆様のご多幸とますますのご活躍を祈念し、ひとこと年頭の所感を申し上げたく存じます。

建築物省エネ法の適合義務化も昨年4月から発効され、建築設備技術者に対する期待は高まる一方です。会員の皆様におかれましてはご多忙の日々をお過ごしいただいていると拝察しておりますが、何卒本年もお健やかにご活躍賜るよう願っております。筆者も会長を仰せつかって2年目となり、協会にも次第に馴染んで参りました。今までじっくり考察させていただいたことを今年には実行に移す年と位置付け、協会の発展に邁進してゆきたいと考えております。

昨年一年の所感ではその考察の一部をお伝えしましたのでご記憶の向きもあろうかと存じますが、その要点を改めて纏めてみますと、①建築設備を取り巻く産業構造の変化の把握、②そのような状況下で皆様の職能を十二分に発揮させることが出来る諸環境の整備、③協会全体の風通しをよくする雰囲気醸成、④建築設備を形而上で語る「文化」への昇華、の4点に集約されます。それぞれの詳細は昨年の1月号をご参照いただくと、今回は最近感じるところを別の角度から申し上げたく存じます。

今までの建築設備は附帯設備と呼ばれていた時代から、新しいテクノロジーは何でも貪欲に取り込む姿勢を継続して参りました。これは建築の高い理念と発展途上のテクノロジーの関係性からすれば、極めて当然な姿です。ところが昨今の理念或いは哲学と技術に対する価値の評価はむしろ逆転しており、理念なき技術

が勢いを得ております。科学技術が無条件に我々の生活の質を向上させた単純な時代は過ぎ去り、理念に合う技術だけを取捨選択或いは限定的な利用を考える時代になったのです。

極論すれば、設備技術者は御用聞きであってはなりません。クライアントにさえ安定した哲学がない時代に、我々が哲学を持たずしてどうして長期間にわたり輝きを発し続けられる建築を提供できるのでしょうか。この理念なき時代を建築分野でリードするのは、テクノロジーという諸刃の剣を帯びた設備技術者なのです。素晴らしいが極めて危険でもあるテクノロジーと建築、ひいては我々の社会がどう折り合っていくのか、そのビジョンを真っ先に構築しなくてはならないのが、設備技術者なのです。これからはテクノロジーを「デザインする」時代です。

毎月お手元に届けられる協会誌「建築設備士」にも多少の変化があるのをお気づきでしょうか。昨年3月号からは特集号を除き表紙のデザインを、会員の皆様から投稿された「設備萌え写真」にしております。これはふざけているわけではございません。前述④の一環でございますが、当協会の変化の兆しと感じ取って頂けると有難く存じます。

本年も建築設備六団体協議会（空気調和・衛生工学会、建築設備技術者協会、電気設備学会、日本空調衛生工事業協会、日本設備設計事務所協会連合会及び日本電設工業協会）と共に、建築に機能という息吹を吹き込みたいと考えております。皆様と一緒にこの業界に春風を吹かせましょう。